

## BOOK REVIEW

Beate Sirota Gordon 『1945年のクリスマス』朝日新聞出版、2016年。

1945年12月24日、ベアテ・シロタ・ゴードン（1923-2012年）はGHQ 民政局員として、父母が残された日本の地に降り立つ。1946年3月4日-5日、民政局602号室（日比谷第一生命ビル）では、日米の担当者による32時間にも及ぶ日本国憲法草案のすり合わせ作業が行われた。本書はその激しい作業に立ち会った著者自身のファミリーストーリーでもある。

著者は通訳として、また、民政局憲法（PT）の人権委員会のメンバーとして、「男女平等」などの条文起案にも従事した。ニコール・ゴードン（米弁護士）による巻末の寄稿文「母ベアテ・シロタ・ゴードンのこと」からは、母の志を受け継ぐ娘の、心に秘めた熱い思いが伝わってくる。杉原千畝（外交官）、白洲次郎（終戦連絡中央事務局次長）、チャールズ・ケージス（民生局次長）など、戦争は凶らずも様々な偉才にそれぞれの役割を与えた。そして、こうした人々の努力の上に、現在の日本の貴重な平和社会が築かれていることを、改めて心に刻みながら、今年もクリスマスを迎えたい。

☆日比谷第一生命ビル（現在も皇居脇に堂々とそびえる）

